

最近、よく見聞きする言葉がある。スローライフ、有機野菜、無農薬野菜、エコロジー生活など。どれもキーワードは健康と環境であり、体にやさしい味、環境にやさしいものを生活に取り入れようというライフスタイルの提案である。

さて、私が生まれた昭和49年の日本の生活はすでに「先進国の生活」であり、電気、水道、ガスのライフラインは当たり前で、電車、車での移動は当たり前のこととして育った。そんな私がアフリカに住んでみるようになった時は、それらが無い生活というのは想像できないことであつたし、不便なのだろうなと考えていた。アフリカの生活は、まさに「後進国の生活」なのだろうと不安な気持ちであつた。

そしてその予想は的中し、ほとんどの家や建物に、町に、村に、電気、水道、ガスはなかった。しかし今帰国してみて、確かにそれは「不便な生活」であつたかも知れないが、「人間的な生活」であつたと思う。そもそも人間が生きていくとはこういうことなのだ、と、20歳を過ぎて始めて知った。しかし最初は私にとっては驚きで、衝撃的な生活であつた。

電気の無い生活は、夜になると見えなくなる生活だ。本を読むときは、灯油の入ったランプを用意する。人が集まっておしゃべりするときも、このランプを中央に置く。はっきりと見えないゆえにしゃべっている人の表情はよくわからないこともあつた。特に、夜の帰り道は、私にとってはチャレンジであつた。全く見えない闇を、家まで歩いていく。私の家を知っている友人に送ってもらわなければ帰れない。手を引いてもらいながら、見えない足元にびくびくしながら帰る。友人はたいてい、笑いながら普通に話している。

またある時、孤児院にいた子供が、体調が悪くなり、夜に病院に連れて行くことになった。病院まではすぐ近くで、直線距離で数百メートルであるが、ドアを開けると真っ暗闇であつた。情けないが、その子供の手を引いてもらい病院まで行った。

「何で見えるの？」と私は聞いた。



水屋さん



木炭屋さん

「よく見ると、見えるよ。もし見えないなら、昼間のうちからよく見て覚えておくと良いよ。月も出てくるしきつと見えてくるよ」と子供は言う。

水が蛇口をひねっても出ない。蛇口があるということは、農村に比べると進んでいるのであるが、絶対水が出るとは限らない。さて、どうするか？水を買に行かなければいけない。タンクを持って出かける。行きはタンクが空なのでらくらく運べる。そして自分のタンクを、タンクの行列の最後尾に置いておく。そうすると、水屋さんが水を入れてくれる。タンクひとつで20円位だろうか。そしてそれを持ち帰るのが難しいというか、力がないだけなのであるが一人で運べない。周りを見ると、子供もお年よりも女性も、一つと言わず二つ持っている。

「どうして持てるの？」と子供に聞く。「どうして大人なのに持てないの？」と逆に聞かれる。お金を払って運び屋さんに運んでもらうこともある。しかも自分より幼いだろう男の子に。

その水を使って洗濯をする。丸いたらいを持ってきて、水をはり、洗濯物と洗剤を入れる。一枚一枚洗っていく。毛布などの大きいものは、二人組みで左右の端を持って、雑巾のように絞っていく。そしてロープに引っ掛けていく。ケニアの日差しは強く、1, 2時間もあれば、ぱりぱりに乾いてくれる。面白いのは、例えば洗濯物を干しているときに雨が降ってくると私は、すぐに家の中にしまうのに対して、ケニア人はしまわない。最初は、忙しいから、雨に気づいてないからしまわないのかと思っているとどうも違うらしい。

「雨に濡れるよ。早くしまわない」と私が聞くと、「雨は神様からの贈り物。落とし忘れた部分もきれいに洗っておいてくれる。雨は綺麗な水と同じだから」と。そもそも、雨が最終的には飲料水にもなり、生活用水にもなっているのだから確かに汚くもない。でも、やっぱり私は最後まで雨に濡れた洋服を綺麗になったとは思えず、雨になる度に洗濯物を取り込んでいた。

アフリカでの生活のうち何が大変かという、やはり衣食住のうち「食」であると思う。

もちろんナイロビなどの都市部で優雅に暮らしている外国人やケニア人の裕福層にとっては、関係のないことかもしれない。ケニアの人口の大半を占める農村の人々は、基本的には自給自足の生活である。田畑を耕し、作物を植え、手入れし、収穫をする。一つの野菜が口に入るまでに、数ヶ月もの月日がかかっている。農薬や化学肥料は高価なものであり、たいていは無農薬で、肥料は牛の糞が使われている。日本では、無農薬や有機野菜と呼ばれ、市場では多少高く売られているのを見かけるが、それはケニアでは当たり前なことだ。主食の豆などは、収穫後も日持ちさせるために高床式の倉庫などで保管する。とうもろこしも、粉にして保管し、「ウガリ」という主食になる。

それらを料理する燃料は、都市部ではガスや電気を使っているところもあるが、農村部では薪や木炭が多い。薪は、山から拾ってきたり、購入したりする。木炭は、環境問題もあり政府は木炭を製造、販売す

ることを禁止しようとしているが、ガスに比べ割り安で、火力も強く、火も簡単に点くことから人気が高い。そう考えるとお湯を沸かすのも、水を汲み、薪を集め、火を点けて、沸騰させるという、さまざまな作業と時間がかけられている。毎日の食事も手間ひまがかけて作られている。そして、お母さんの手だけではなくて、家族みんなが、家族が生きていくために、何らかの仕事を担っている。

私が今まで送ってきた便利な生活の危うさは、「人間らしくしない生活」の危うさがあるように思う。そもそも、私達はもっと五感が発達していて、もっと体力があって、生命力があったのでないかと思う。ケニアでは、生活することに、生きていくことにとっても時間と手間がかかる。「便利なものがない」生活は、自分の身体を健康に丈夫にしてくれたように思う。子供と一緒に、農作業をし、水を汲みに行き、洗濯や料理をし、暗闇を歩き、車を使わず歩き、その生活に一つ一つに時間をかけた。そんな生活の様子を日本の祖父母への手紙に書いたことがあった。「昔は日本もそうだったね」という返事が返って来た。

そんな時代から発展してきた先進国日本の過去を知ることも難しくなった。私の五感は、とても発達したように思う。そのすべてを総動員して生活するとき、人間はストレスとは無縁の健康体であるように思う。私は、日本で失っていた「人間らしさ」をケニアでの生活で取り戻したように思う。私の体は、もっといろんなことが出来ることを発見した。

今流行しているスローライフや環境に優しいエコライフなどは、人間の人間らしさを思い出すからこそ、リラックス出来たり、心地よかったりするのではないだろうか？アフリカにはまだそんな生活がある。そしてそれは、後れた国の生活と言ってしまうには違う気がする。人間がそういう生活をしてきたことを思い出させてくれるふるさとのようである。アフリカ人は先進国の便利な生活へ憧れまたそれを目指し、先進国から来た人間は、アフリカの生活に懐かしさを感じて、いいなと思う。不思議なことだ。